

書評

河合幹雄 著

「もしも刑務所に入ったら」

只木 慧
Kei TADAKI

「悪いことをすると刑務所に入れられちゃうよ」といった言葉は、きっと誰も耳にしたことがあると思う。しかし、では「刑務所に入るとはどういうことか」と問われたとき、それに答えるだけの材料をわれわれはあまり持っていない。それに答えてくれるのが本書である。

本書では刑務所に入るまでのプロセスや刑務所の種類はもちろん、刑務所での1日や生活、刑務官について、そして刑務所にまつわる問題について順を追って解説してくれる。通常の生活では考えられないほどの自由を取り上げられた生活を、わが身が過ごしたらと考えたとき、読んでいて辛くなることも多かった。何度もでてくる甘い物への飢餓感、週に2回もしくは3回しか入れない風呂、ごみ一つ勝手に捨てられない生活。さらに人とのつながりを制限され、手紙一つとっても便箋の枚数や出す回数に条件があること、面会という心の支えにも回数などの制限があること。それらに対し「受刑者の楽しみと癒し」についても触れられているが、やはり辛さ、厳しさが印象に残った。

文章もわかりやすく高校生、あるいは中学生でも読めるだろう。しかし、一方で本書を安易に薦めたくないとも思う。刑務所への興味があるとき、それはいいかえると、刑務所に入っていない自分に優越感を抱く考えではないと本当にいえるだろうか。本書にも大学の見学会で刑務所の見学会だけは希望者が殺到するという箇所があるが、それは全員が純粹な刑務所という場所への関心なのだろうか。

本書の末尾には「罪を犯せば必ず被害者がいることを忘れてはならない」とあるが、それらを思えば思うほど、ページをめくる手が重くなってくる。どうかそのことを念頭に置き、読んでほしい。

